０８／１１／２３　　礼拝メッセージ　　近藤修司　牧師

主　　題：アブラハムの救い５　救いは恵みによる
聖書箇所：ローマ人への手紙　４章１４－１８節

律法を守り行なうことによってはだれも救われない、パウロはアブラハムでさえもそうであった、彼は律法を守り行なうことによって救われたのではないということを教えました。パウロはその理由を三つ挙げました。それが１３－１５節のところに記されていました。

◎なぜアブラハムは律法を守ることによって救われなかったのか。
１）救いは信仰によるものだから　　１３節
２）神の約束は真実だから　　１４節
３）信仰だけが神の怒りを取り除くものだから　　１５節

２）神の約束は真実だから　　１４節

一つ目は前回見ました。今日は１４節から、二つ目の理由として彼が挙げたこと「神の約束は真実であり、神が言われたことは必ずそうなる、神とはそのようなお方である」と教えていることを見て行きます。１４節**「もし律法による者が相続人であるとするなら、信仰はむなしくなり、約束は無効になってしまいます。」**。信仰によって救われると話したパウロ、ここで彼は神が言われたことは真実である、神が言われたことは絶対その通りになるということを教えるのです。この１４節を見るとパウロは、事実でないけれども、もしこうだとするならと仮定の話をするわけです。彼が言うことは、もし律法を守り行なうことによって救いの相続人となる、救われるなら、もしそれが事実だとするなら信仰は非常に空しいものだ、信仰は無効であるということです。信仰は空しい、信仰は無力である、信仰は無効である、信仰というのは効果がないと言うのです。なぜなら、みことばは私たちに信仰によって救われると教えているからです。もし信仰によって救われることがなければ、この信仰というのは無力なものだと。キリストのよみがえりのことを話したパウロは、Ｉコリント１５：１４でも**「そして、キリストが復活されなかったのなら、私たちの宣教は実質のないものになり、あなたがたの信仰も実質のないものになるのです。」**と語っています。ここで**「実質のない」**と言っているのは、つまり、今私たちがこのローマ４：１４で見ている**「むなしい」**と同じ意味を持ったことばです。イエスが復活しなかったら私たちの語っているメッセージは空しいものであり、そして、その信仰も、つまり、イエス・キリストは十字架で死んでよみがえったという、この信仰、それ自体も空しいものだと言うのです。救いがないもの、罪の赦しをもたらさないものをどんなに一生懸命信じていたとしてもそれは空しいものです。何の効果のないものを一生懸命信じてもそれは空しいものではありませんか？パウロはそのことを言わんとしているのです。

もし、律法を守ることによって罪の赦しがあるとするなら、イエスを信じたら救われるというこの信仰は非常に空しい無価値なものであって、**「約束は無効になってしまう」**とパウロは言いました。ここでも、彼は実を結ばないとか、役に立たないということばを使って、救いをもたらさない信仰など意味がないと、あえてそのように言ったのです。彼が言いたいことは明らかです。律法を守り行なうことによっては、だれひとりとして神の救いを得ることはないということです。私たちがもうすでに見て来たように、パウロは繰り返して、もういいと言う程私たちに同じことを語り続けています。「信仰によってのみ人は救われる」ということを彼は繰り返して教えています。

◎キリストを信じる信仰によって救われることを疑う＝神を偽り者にすること

皆さんも聞いていて非常にくどく感じるかもしれません。でも、私たちが覚えなければいけないことは、このようなパウロのメッセージを何度も聞いていても、なかなかそれを信じることができない人たちがいたということです。パウロはこの手紙をローマにいる人々に送るわけですが、その読者たちの中には、そのように「信仰によってのみ人は救われる」ということを受け入れることができない人たちがいたという事実を私たちは忘れてはならないし、現に今も私たちの周りにそういう人々がいます。「信仰によってのみ人は救われる」ということに対して、「いやそれはおかしい」と言う人々がいると言うのです。イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われるということを信じていない人々、信じることのできない人々というのは、言い方を変えると、その人は**「神を偽り者としている」**と聖書は言います。Ｉヨハネ５：１０で**「神の御子を信じる者は、このあかしを自分の心の中に持っています。神を信じない者は、神を偽り者とするのです。神が御子についてあかしされたことを信じないからです。」**と教えます。神はこんなにすばらしい救いを備えてくれたのに、なぜそれを受け入れないのでしょう？その理由

は、彼らにとってそれはすばらしいものと思えないからです。神が言われたことは真実であると思っている人は神が言われたことを信じます。信じないのはそれが真実だと思えないからです。私たちは真実であると思えないことを信じることはしません。だから、神が言われたことを信じない不信仰は、神が言われることが真実であると認めていないからです。イエスを信じていない人々は、悲しいことに、**「神を偽り者とする」**のです。神は「うそつき」だと言うのです。神は「イエスを信じることによって救われる」と言われたが、それはうそだ、そんなことによって救われるなどあり得ないと、神をうそつきにしているのです。

でも、よく考えてみると、私たち信仰者もそのような罪に陥ることがあります。神は私たちにすばらしい約束を与え続けてくださっています。でも、その約束を聞いていながら、見ていながら、知っていながら、果たして信じているかどうかです。神は私たちを日々導いてくださること、神は私たちのすべての必要を満たしてくださること、神は常にみこころをなしてくださる、そのみこころとは、あなたにとって、私にとって最善であると知っていながら、私たちはなかなか信じることができないのです。つまり皆さん、このように神が言われたことを信じないという不信仰は「神さまはうそつきだ」と言っていることだと言うのです。あなたはそのような罪を犯していませんか？神が言われたことは必ずそうなる、神が言われたことは真実だと、皆さんそのように信じていますか？確かに、神はそう言われたけれども、私はどうも信じられないともしあなたが疑っているなら、あなたのその行為は**「神を偽り者とする」**のです。何と恐ろしい罪でしょう。何という神を冒涜する行為でしょう。でも気をつけなければ、私たちイエス・キリストを信じている者たちも、神の約束をなかなか信じることができないという誘惑を経験し、そのような失敗を犯してしまうのです。

ローマ３：４で私たちはすでに学びました。**「絶対にそんなことはありません。たとい、すべての人を偽り者としても、神は真実な方であるとすべきです。それは、「あなたが、そのみことばによって正しいとされ、さばかれるときには勝利を得られるため。」と書いてあるとおりです。」**と。人間の言うことには確かに間違いがあります。人間の言うことには悲しいことに問題もあります。なぜなら、罪があるから、不完全だからです。私たちは完全なことをなすことはできないのです。でも、神はそうではありません。だから、神なのです。神の言われることはすべて完全であり、神のなさることは常に最善です。神が言われることは常に真実である、だから神なのだとそのような確信をもって神の約束を覚えておられますか？そのような確信をもって今日を歩んでおられますか？信仰者の皆さん、どこかに疑いがありませんか？

パウロがこのローマ人への手紙の中で言わんとしていることは、神の約束は真実なのだから、神がこのようにあなたの罪を赦すと言われたら必ずそのようになる、神の言われることには誤りはない、「信仰によってのみ救う」と言われた神は、信仰によって私たちを救ってくれる、信仰だけが私たちを罪から救うのだということです。神の言われたことに偽りはありません。それを信じるかどうか、それは私たちの問題です。

３）信仰だけが神の怒りを取り除くものだから　　１５節

三つ目の理由として、この１５節でパウロが言うことは、実は、信仰のみがあなたから神の怒りを取り除くものである、言い方を変えれば、律法によって救いを得ようとすることは、逆にあなたの身に神の怒りを招くことになるのだということです。律法による救いを求める人々、行ないによる救いを求める人々は、あなたが望んでいる神からの祝福や救いではなくて、かえって神ののろいをいただく、神の怒りをあなたの上に積み上げることになるのだと、そのようにパウロは言うのです。１５節に**「律法は怒りを招くものであり、律法のないところには違反もありません。」**とあります。もうすでに、私たちはこの３：２０で**「なぜなら、律法を行なうことによっては、だれひとり神の前に義と認められないからです。律法によっては、かえって罪の意識が生じるのです。」**と記されているところを見ました。律法は神の怒りを招くものだ、どうしてそうなのか、どうして良いことをしているのに結果的に神の怒りを自分の身に招くことになるのか？人が羨むようなこと、人が立派だと言ってくれるようなことをしていているのに、なぜ、私は神の怒りを受けるようになるのか？もうすでに私たちが見て来たように、パウロはガラテヤ３：１０で**「というのは、律法の行ないによる人々はすべて、のろいのもとにあるからです。こう書いてあります。「律法の書に書いてある、すべてのことを堅く守って実行しなければ、だれでもみな、のろわれる。」**と教えてくれました。どんなに人々の前に良いことをしても、もし、あなたが良いことによって救いを得ようとするのであれば「すべての点で完璧にその律法に従わなければならない」という条件があります。わずかに１点でもそれに逆らったなら、もうそれであなたは救いのチャンスを失ってしまうというのです。聖書が教えていなくても、私たちは分かっています。すべての点で完璧に神の命令に従うことができる人はどこにもいません。神の律法に１００％完璧に従い続けて来た人、そして、これからも従い続けて行けるという人はこの世にひとりもいません。だから、行ないによって救いを得ようとする人には、次のことをしっかり覚えていなければいけないのです。それは、あな

たのしていることには神の祝福は伴わないということです。逆にあなたのしていることには神の怒りが伴うというのです。神の祝福ではなくそこには神ののろいがあると言うのです。というのは、神はどんな小さな罪でもその罪を憎んでおられる方、また憎まれる方だからです。詩篇５：５に**「誇り高ぶる者たちは御目の前に立つことはできません。あなたは不法を行なうすべての者を憎まれます。」**とあります。神は不法を行なうすべての者を憎まれます。神がどれほど罪を憎んでおられるかです。箴言８：１３には**「主を恐れることは悪を憎むことである。わたしは高ぶりと、おごりと、悪の道と、ねじれたことばを憎む。」**と記されています。神に喜ばれようとするなら悪を憎めと言うのです。なぜなら、神は悪を憎んでおられるからと。神が憎んでおられる悪を愛するということは、あなたは神に憎まれる者になるということです。もう一箇所、モーセが記した申命記３２：４１に**「わたしがきらめく剣をとぎ、手にさばきを握るとき、わたしは仇に復讐をし、わたしを憎む者たちに報いよう。」**と記されています。**「わたしを憎む者たちに報いよう」**と神は言われます。神に逆らっている人々、彼らは神を憎む者だ、そして、そのような人々に対しては、神の厳しいさばきがある、その罪に対して神が報いを与えるというのです。皆さんよく分かっておられるように、ここで言われている神ののろいや怒りは、私たち人間が日々の生活で経験するようなものとは違います。あの人が嫌いだとか、あの人が好きだとか、そのような次元のことではありません。聖い罪のない神は、どんな小さな罪でも憎んでおられ、その罪を憎まれる神はその罪に対してさばきがあると警告をされたのです。私たちが罪を愛し、罪を犯し続けて行くなら、そこに当然あることは神からの怒り、神からのさばきです。

なぜ、そのようなことに神のさばきがあるのでしょう？もう一度、ローマ書に戻ってください。律法は怒りを招くものだと言いました。なぜなら、律法を完璧に守れる人がいないから、律法によって救いを得ようとするならそこに来るのは神の怒りである、すべての人が罪を犯しているからです。４：１５の後半には**「律法のないところには違反もありません。」**とあります。この**「違反」**ということばは「不従順、犯罪」と訳すことができることばが使われています。つまり、パウロがここで言っていることは、律法がないときにも間違っているという思いをもっていたというのです。ところが、律法が与えられ、律法に自分の行為を照らし合わせることによって、私たちが神の前に有罪である、犯罪を犯しているということが明らかになったと言うのです。例えば、両親との関係を考えてみてください。子どもが両親に反抗する時、その反抗している子ども自身はこれは間違っているということが分かっています。なぜなら、心が苦しい、心が間違っていると叫んでいるからです。律法があってもなくても、心は私たちにそのように働きます。ところが、律法が与えられたことによってはっきりしたことは、律法は「あなたの父と母を敬いなさい」と記すから、この律法に逆らったなら、それが罪であることが明らかになったのです。例えば、「盗み」を考えてみてください。人から言われなくても盗みを働いたときは、これは間違っている、これは悪いことだと私たちの心が叫びます。神はそのように私たちを造ってくださったからです。聖書のことを知らなくても、間違ったことをしたときに、それは間違っているということを私たちはある程度知ることができます。しかし、律法が与えられ、律法はこのように言いました「盗んではならない」と。では、その律法をいただいた私たちは、その律法に自分を照らし合わせるとき、盗みを働いたこと、それは実際に物を盗むだけではない、心の中で人の物を欲しいと思うことも盗みだと聖書は教えていますが、次のことが明らかにされるのです。それは「私は神の律法を犯した、神の法を犯した、神の前に私は罪を犯した、神の法律に触れた」と。ですから、律法が与えられることによって罪が生まれたのではないのです。律法が与えられることによって、私たち自身、言い訳の機会を失ったのです。車で道路を何キロで走っても、法律がなければだれからも咎められませんが、律法が与えられることによって、その法律を犯したときには罰せられます。律法がなければ、言い訳が何とでも立ったのです。でも、律法が与えられることによって、それを犯した自分はそれに対して言い訳ができなくなったのです。あなたは神の法に触れた、あなたは神がしてはならないということをしたと。したがって、律法を守ることによって私たちは救いを得ることができるのでしょうか？いいえ、あなたは律法を守れないし、そして、守れないあなたは神の命令に対してことごとく逆らっているのです。律法を守ることに救いを得ようとする人は、かえってその人の上に神の怒りを積むことになると、このような理由を述べてパウロは言うのです。あのアブラハムも律法を守り行なうことによって救いを得たのではない、あのアブラハムも信じる信仰によって救いに至ったと言います。救いは信仰のみなのだとパウロは教えたわけです。

◎恵みによる救いの結論　　１６－１７節

そのことを語ったパウロは１６―１７節で結論を述べます。９節から語り始めて来た「恵みによる救い」というものの結論を彼はここで述べるのです。１６節は**「そのようなわけで」**ということばで始まっています。彼がこれから結論を語ろうとしていることが明らかです。**「世界の相続人となることは」**、つまり、このすばらしい神の救いという祝福をいただくためにはどうしたらいいのか、**「信仰によるのです」**。また、「信仰しかない」というこ

とが出て来ました。主イエス・キリストを信じる信仰のみが私たちをその罪から救い出すのだと再度言います。最初にも話ししたように、何度聞いても、行ないによって救いを得られると信じている人々は、このような教えを受け入れません。もしかすると、皆さんもかつてはそうだったかもしれません。この神の救いのメッセージを何度聞いてもなかなか受け入れることができなかった。このローマ書１０章でもパウロはまた同じようなことを繰り返しています。イスラエルの人々、自分の同胞が救われてほしいと願っていたパウロは、彼らの間違いを次のように述べています。ローマ１０：２－３に**「私は、彼らが神に対して熱心であることをあかします。しかし、その熱心は知識に基づくものではありません。:3 というのは、彼らは神の義を知らず、自分自身の義を立てようとして、神の義に従わなかったからです。」**とあります。今、私たちが学んで来たことを彼は再びここで繰り返しています。確かに、イスラエルの人々、ユダヤ人たちは熱心で、一生懸命神の教えに従い、その教えを守ろうとしている。でも、悲しいことに、その熱心さは神の真理に立っていないと言うのです。だから、彼らは**「自分自身の義を立てようとして」**いる、自分の満足です。これだけのことをしたから、これだけのことをして来たからきっと神は私にすばらしい祝福をくれるに違いないと。私たちは何かを信じて生きています。どこの国であっても人々は何かを信じています。考えなければいけないのは、その信じているものが真実であるかどうかです。様々な道を経ても私たちは究極的に同じところに行くのだと言う人たちはたくさんいます。どんな宗教を信じても行き着くところはみな同じだと。問題はどうしてそれが真理だと言い切れるのかです。神は本当にそのようなことを言われたのかどうかです。神は「イエス・キリストを信じる信仰によってのみ救われる」と言われました。それ以外の道はないのです。

イスラエルの人々はそのことを信じることができなかった。神が命じたその命令を一生懸命守り行なうことによって究極的に救いに至るのだと彼らは信じていたのです。パウロは悲しい、愚かだ、彼らは神の義を知らない、神の教えを知らないと嘆くのです。彼らは自分自身の義を立てようとして、神の教えよりも自分たちの教えを優先していると。この問題はイスラエルの人々だけの問題ではありません。このような問題をもっている人、同じ過ちを犯している人はこの世にあふれています。この国にもこの町にもあふれています。このローマ４：１６のみことばは続けてこのように記されています。**「それは、恵みによるためであり、」**と、パウロが言いたいことは、神が備えてくださった救いというのは、**「恵みによる」**ものであって私たちの行ないではないということです。ローマ３：２４に**「ただ、神の恵みにより、キリスト・イエスによる贖いのゆえに、価なしに義と認められるのです。」**とありました。覚えておられますか？また、ローマ１１：６にも**「もし恵みによるのであれば、もはや行ないによるのではありません。もしそうでなかったら、恵みが恵みでなくなります。」**と記されています。つまり、パウロはここでも恵みと行ないとは相容れないもの、相反するものであると言っているのです。行ないによって救いを得ようとするのなら、あなたは恵みを無視しているし恵みに逆らっていますが、恵みによって救いを得ようとするのなら、あなたは行ないによって救われるという考えを真っ向から否定するのです。

皆さんもよく覚えているみことばで、この学びの中でも何度か学んだように、パウロはエペソ人への手紙２：８－９で**「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。:9 行ないによるのではありません。だれも誇ることのないためです。」**と教えています。このように、もう何度もパウロは私たちに「救いは行ないではない」、「救いは信じる信仰によって、神の恵みによって与えられるものだ」ということを繰り返すのです。

◎恵みとは？

では、「恵み」とはいったい何でしょう？簡単に言えば、これは神の一方的な恩顧です。神の一方的な慈しみです。この「恵み」というのは永遠の滅びに向かって当然の罪人である私たちにとって、最もふさわしくない神のあわれみであり神のご好意です。私たちのような者が受けるに最もふさわしくないもの、それがこの「神の恵み」です。でも、感謝なことに、この恵みによって私たちは救いに至るのです。ダラス神学校、組織神学の教授であったチャールズ・ライリーは「義認は神の側における恵みの行為であって、キリストの犠牲の土台の上に立って可能とされている」と言っています。神による一方的な行為だと言うのです。神ご自身が救い主をこの世に送ってくださり、救い主イエス・キリストをあなたや私の身代わりとして十字架で殺し、主をその死からよみがえらせてくださったこと、すべて神のなさったことです。私たちが何かをしたからではありません。神が一方的に救いを備えてくださり、そして、その救いをイエス・キリストを信じる私たちに与えてくださったのです。そこには私たちのいかなる行ないをも挟む余地がありません。

神が救ってくださるのでなければ、私たちがたとえどんなにすばらしい信仰をもっていても、救いをいただくことはないと言うのです。もう一度聞いてください。神が救ってくださるのでなければ、私たちがどんなにすば

らしい信仰をもっていても救いをいただくことはないのです。たとえ、あなたがどんなにすばらしい信仰をもっていたとしても、行ないによって救われるのではないのです。すべて神が私たちに救いを与えてくれるのです。この信仰という道を通して、つまり、救いの主導権はすべて神なのです。だから、神の恵みだと言ったのです。神の私たちに対する贈り物なのです。神に好意を抱かせる何かが私たち人間にあったから、神は私たちに救いを備えてくれたのではないのです。神にあわれみの思いを抱かせる何かが私たち人間にあったから、神は救いを備えてくれたのではないのです。神の祝福をいただくようなことを私たち人間がしたからでもありません。また、救いをいただくのにふさわしいことを私たちがしたからでもないのです。神はご自身の一方的な愛と恵みによって救い主をこの世に送ってくださり、そして、私たち罪人を救ってくださるこの神を信じるときに、神の義が、この救いが贈り物として私たちに与えられるのです。「神の恵みによって救われる」、クリスチャンの皆さん、これが私たちの誇りです。これが私たちの信仰です。私が何かをしたからではない。何もできずにいた私、できることは神に逆らうことだけだった私、救われる資格の全くない私、そんな私に神が一方的に救いを備えてくださり、その救いを与えてくれたのです。だから、私たちは「ハレルヤ！」と言ってこの神だけを称えるのです。私たちがこの救いに関して何か自慢できるところがあるでしょうか？ありません！人々の前で何か誇るところがあるでしょうか？ありません！私たちの唯一の誇り、それは、罪の中を歩んでいた罪の奴隷であったどうすることもできない私、滅んでしかるべき私を救ってくださったこの神だけです。それが私たちの誇りなのです。

◎すべての子孫に

１６節でパウロは**「こうして約束がすべての子孫に、すなわち、律法を持っている人々にだけでなく、アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。」**と続けます。**「すべての子孫に」**と言っています。そこには**「律法を持っている人々」**や、また**「アブラハムの信仰にならう人々」**が含まれています。どういうことでしょう？ユダヤ人であろうと異邦人であろうと、神の救いに人種や民族は関係ないということです。律法を与えられていようと与えられていまいと、割礼を受けていようと受けていまいと、どういう民族であろうとも関係ないと言うのです。すべて、この信仰によってキリストのもとに来る者たちを神は救ってくださるのです。信仰によって救いをいただいた人たち、**「すべての子孫に」**と言うのです。

◎アブラハムと同じ信仰

そして、１６節の最後に**「『わたしは、あなたをあらゆる国の人々の父とした。』と書いてあるとおりに、アブラハムは私たちすべての者の父なのです。」**と書かれています。神はアブラハムに約束を与えました。私たちはそのことを創世記の中に見て来ました。その約束が成就したというのです。アブラハムは割礼を受けたあのユダヤ人の父です。しかし同時に、割礼を受けていないキリストを信じる異邦人の霊的父でもあるのです。私たちの霊的父です。なぜなら、私たちの信仰はアブラハムの信仰と同じだからです。彼が神を信じて救いに至ったように、私たちも同じように神を信じてこの救いに至ったのです。そのことをパウロはここで言っているのです。

◎救われた人々のすばらしい保証

ここで私たちが一つ覚えておきたいことは１６節に**「アブラハムの信仰にならう人々にも保証されるためなのです。」**と記されていたところです。パウロは救いの話をして来ました。信仰によって救われる、神の恵みによって救われるということを話ました。そして、この信仰によって救われた人々にはすばらしい保証があると言うのです。どのような保証でしょう？「救いを失わない」という保証です。その救いは永遠のものであるという保証です。保証ということばは「信じるに足りる」、「当てになる約束」、「確かな」、また「頼りになる」という意味です。神は信じるすべての人に最もふさわしくない祝福を与えてくれました。罪の赦しを与え、そして、私たちをご自身の栄光の姿に似た者へと、栄光から栄光へと日々変えて行ってくださるのです。そして、後には私たちを栄光の中へと招き入れてくださる。この神が与えてくださる救いにはすばらしい保証がついています。私たちがスーパーに行って買ったものにも保証がついています。でも、その保証は永遠のものではありません。神の救いには永遠の保証がついているのです。なぜでしょう？永遠の神が与えてくださる保証だからです。

今話ししたように、その保証というのは救いを失うことがないということです。皆さんがよく覚えておられるように、ヨハネの福音書１０：２８－２９でイエスが救いに関して**「わたしは彼らに永遠のいのちを与えます。彼らは決して滅びることがなく、また、だれもわたしの手から彼らを奪い去るようなことはありません。:29 わたしに彼らをお与えになった父は、すべてにまさって偉大です。だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」**と言われました。神は私たち信じる一人ひとりに永遠のいのちを与えてくれる、彼らは決して絶対に滅びないというのです。神によって救われた人が永遠の滅びに至ることは絶対にないと言うのです。**「また、だれもわたしの手から彼ら**（クリスチャンたち）**を奪い去るようなことはありません。」**と言います。一度神のものとされたらだれもそれを

神の手から奪うことはできないのです。神の奴隷、神のしもべとなった者が、再びサタンの奴隷に、サタンのしもべになることはあり得ないのです。**「だれもわたしの父の御手から彼らを奪い去ることはできません。」**、だれもできないとこんな力強い約束を主イエスは私たちに与えてくださったのです。クリスチャンである皆さん、私たちはこの神のものとして永遠を神とともに過ごすことが赦されたのです。

もう一箇所、ローマ人への手紙８：３１－３９を開いてください。**「では、これらのことからどう言えるでしょう。神が私たちの味方であるなら、だれが私たちに敵対できるでしょう。:32 私たちすべてのために、ご自分の御子をさえ惜しまずに死に渡された方が、どうして、御子といっしょにすべてのものを、私たちに恵んでくださらないことがありましょう。:33 神に選ばれた人々を訴えるのはだれですか。神が義と認めてくださるのです。:34 罪に定めようとするのはだれですか。死んでくださった方、いや、よみがえられた方であるキリスト・イエスが、神の右の座に着き、私たちのためにとりなしていてくださるのです。:35 私たちをキリストの愛から引き離すのはだれですか。患難ですか、苦しみですか、迫害ですか、飢えですか、裸ですか、危険ですか、剣ですか。:36 「あなたのために、私たちは一日中、死に定められている。私たちは、ほふられる羊とみなされた。」と書いてあるとおりです。:37 しかし、私たちは、私たちを愛してくださった方によって、これらすべてのことの中にあっても、圧倒的な勝利者となるのです。:38 私はこう確信しています。死も、いのちも、御使いも、権威ある者も、今あるものも、後に来るものも、力ある者も、:39 高さも、深さも、そのほかのどんな被造物も、私たちの主キリスト・イエスにある神の愛から、私たちを引き離すことはできません。」**、私たちはもう神のものなのだということです。なぜそう言い切れるのでしょう？この前の３０節に救いについてこのように記されています。**「神はあらかじめ定めた人々をさらに召し、召した人々をさらに義と認め、義と認めた人々にはさらに栄光をお与えになりました。」**と。これが救われた人です。これが本当のクリスチャンなのです。その人は**「神があらかじめ定めた」**のです。神は定めて人をご自分のもとに召してくださった、呼んでくださったのです。そして、神はその人を義と認め、罪の赦しを与え、義なる者と宣言してくださったのです。そして、その人には栄光のからだが与えられるのです。神があなたを選んでいてくださり、神があなたを救いへと導いてくださった、そして、救ったあなたに神は栄光を約束してくれた、これらすべては神のみわざだったと言うのです。

ですから、先に話ししたように、私たちがイエスを信じるという選択ができたのも、実は、神が働いてくださったからです。だから、恵みによって救われたのです。神が働いてくださり、神が分からせてくださらなければ霊的に死んでいる者に神のことは分かりません。救われている皆さん、このみことばが教えるように、神はあなたを選んでいてくださったのです。そして、神があなたを救いへと導いてくださり永遠の栄光を約束してくれたのです。だから、あなたは絶対に救いを失わないのです。私たちがしてはならないことは、救われていない人に永遠の保証を与えることです。救われていない人に「あなたは救われている、あなたは永遠に救いを失うことがない」という保証を与えることは大きな間違いです。私たちがもうすでに見て来たように、神が働いておられるから救われている人は自分自身で分かります。救いは救われたその時点から神の働きが始まるからです。私たちは生まれ変わるのです。神に対する渇きをもちます。神に救われた人はこの確信を持って今日を生きることができます。私は永遠に救いを失うことはない、なぜなら、神が私を救ってくれたから。ですから、私たちの救いの土台は、私たちの忠実な歩みでもないし、従順な行ないでもありません。すべて神のみわざによるのです。

もう一度、今日のテキストのローマ書を見てください。ローマ４：１７に**「このことは、彼が信じた神、すなわち死者を生かし、無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、そうなのです。」**とあります。パウロは今話して来たことの確信がどこにあるのかということをこの１７節で教えるのです。私が語って来たことの確信は、私のうちにあるのではない、神にあると言うのです。私の神はこのようなお方、ゆえに、私は神の言われたことを信じるというのです。そして、ここには神がどのようなお方なのかということをパウロは二つ挙げています。

◎どのような神か？

１）死者を生かす

神は死者を生かす方です。確かに、この４：２４－２５を見ると「死者を生かす」ということが出て来ます。**「また私たちのためです。すなわち、私たちの主イエスを死者の中からよみがえらせた方を信じる私たちも、その信仰を義とみなされるのです。:25 主イエスは、私たちの罪のために死に渡され、私たちが義と認められるために、よみがえられたからです。」**、死んでからよみがえって来ると。でも、この１７節でパウロが**「死者を生かし」**と言ったのは、死人がよみがえるということよりも、アブラハムとサラに関してのこと、特に、彼らが子どもをもうけるということに関してこのように語ったと見ることができます。なぜなら、後にそのことが出て来るからです。特に、１９節を見ると**「アブラハムは、およそ百歳になって、自分のからだが死んだも同然であることと、サラの胎の死んでいることとを認めても、その信仰は弱りませんでした。」**と**「死んでいる」**ということばが２回出て来ます。ですから、恐らくパ

ウロはこの１７節で、アブラハムもサラも子どもをもうけるという観点からは**「死んでいた」**、子どもをもうける年齢をはるかに超えていた、子どもをもうけることも子どもを宿すことも不可能な年齢に達していたと言っているのです。でも、神はそのような彼らを通して奇蹟のみわざを為されたと言うのです。そのことについて私たちは次回学びます。パウロはここで、私たちの神はそのように人間的に不可能と思えることを、みこころであるなら可能となさる方であり、神の前に不可能は一つもないと言うのです。

２）無から有を生み出す

二つ目に、神は無から有を生み出す方、つまり、創造主だと言うのです。**「無いものを有るもののようにお呼びになる方の御前で、」**と言っています。この**「呼ぶ」**というのは「存在するように命じる」ということです。思い出してください。神がこの天と地をお造りになったとき、神はどのようにそのわざを為されたでしょう？**「神が「光よ。あれ。」と仰せられた。すると光ができた。」**（創世記１：３）とあります。神はご自身のおことばをもってこの世界のすべてのものをお造りになったということです。パウロはそのような神だと言います。イザヤ書４８：１３に**「まことに、わたしの手が地の基を定め、わたしの右の手が天を引き延ばした。わたしがそれらに呼びかけると、それらはこぞって立ち上がる。」**とありますが、これは神の創造のみわざです。神が語るならそのようになる、そのような神だと言うのです。もちろん、私たちはこの１６節のみことばから、神は同時に、真実な方であるということを見て来ました。アブラハムに対しての約束はまったくそのように成就しました。このような約束の成就は私たちに神は真実なお方であること、神が言われたことは必ずそうなるということを教えてくれます。言われたことを必ずその通りになさるお方、不可能の何一つない方、何もないところから物を造り出すことのできる方、これが私たちの神だと言うのです。そして、この神が罪人である私たちに「信仰によってのみ罪の赦しを得ることができる」という約束を与えてくださった、これが神のメッセージです。

この約束を信じておられますか？クリスチャンの皆さん、こんなにすごい神があなたの神であることを覚えて、今、喜びをもって、感謝をもって、期待をもって生きておられますか？いろいろな強敵が人生にいます。そこには大きな敵がいます。自分の力ではどうすることもできない大きな敵がそこにいるのです。無理だと思うことが山ほどあります。しかし、私たちはその中にあって、私たちの神がどのようなお方であるかを覚えるときに、私たちは「無理だ」と言う信仰者ではなくて、主のみこころがなされることを期待し、そのことを信じ、そして、主にゆだねる信仰者として生きて行くことができます。そのような信仰者として生きることを神は望んでおられるのです。あなたは信仰において弱っていませんか？信仰において落ち込んでいませんか？絶望の中を歩んでいませんか？希望を見失っていませんか？信仰者である皆さん、私たちはしっかり見るべきところを見なければいけないのです。私たちの神がどのような神であり、どのような約束をくださったのか、そのことを覚えなければいけないのです。なぜなら、私たちの神は死者を生かす神であり、無から有を造り出す神であり、約束を必ず守られる神です。それが私たちが信じた神であり、そのような神が私たちを救ってくれたのです。それにふさわしく生きることです。その神によって救われた者として、ふさわしく今日を生きることです。